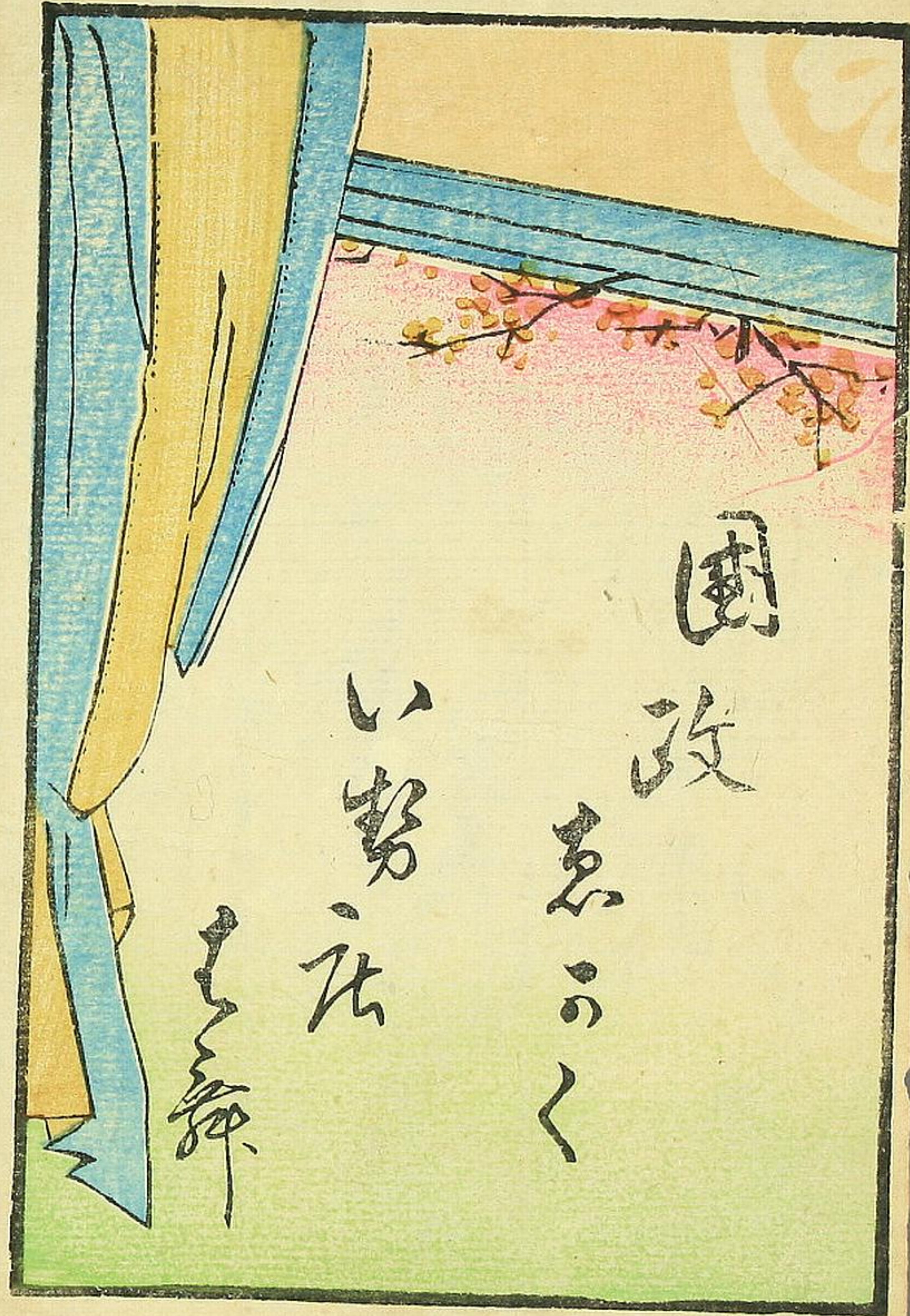




鬼^{おに}薙^ひ 清^{せい}吉^{きち} 元^{もと}悪^{あく}傳^{でん}月^{つき}檻^{かぎ}

梅屋 國政



團政

志らく

い勢に

まを舞

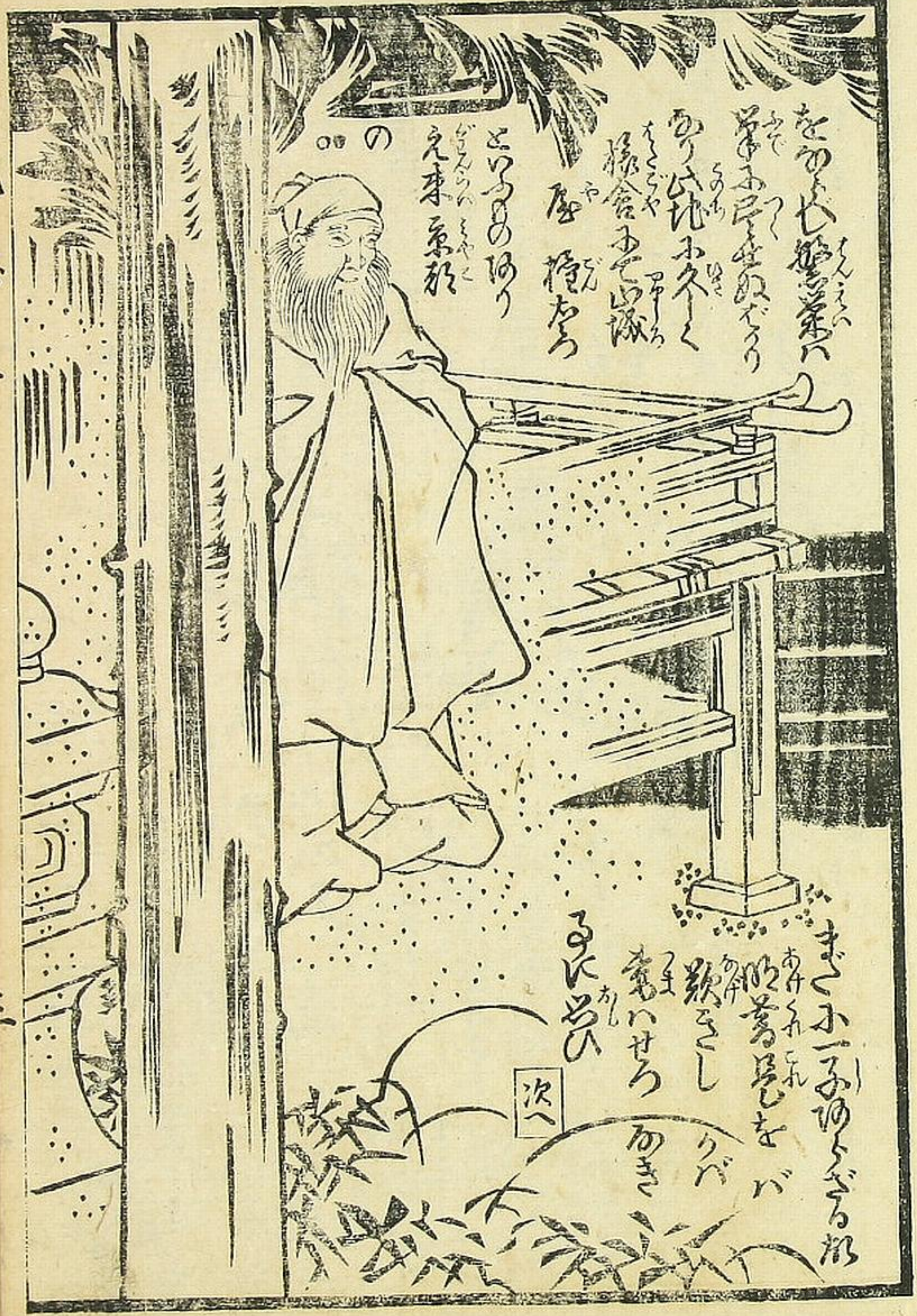
鬼和尚 吉兎悪傳月檻緒書

昔く杭太郎が鬼ヶ嶋の小説を鬼美彦の因縁浮世に
 やし丹波の園に鬼を鬼灯ふおの文字疎り女菩薩乃
 舌頭にもく其音成やん嗚呼今や用明に秋子當り
 令娘稚君もは存知乃往時鬼と壁言よる残虚無道乃
 び戒も数多ありあれそ中鬼に異名の清若が奸
 智子あけし悪吏の一期を綴り合せて勸徳に獅助せん
 その中今般般鬼の小冊へ諸書せよの需に忘下相を鬼へ乃
 言澤に頭や皿を書志たせ

世西家主人

兎思上





をの心は
 年ふに
 ありは地
 様合
 屋
 の
 元来系

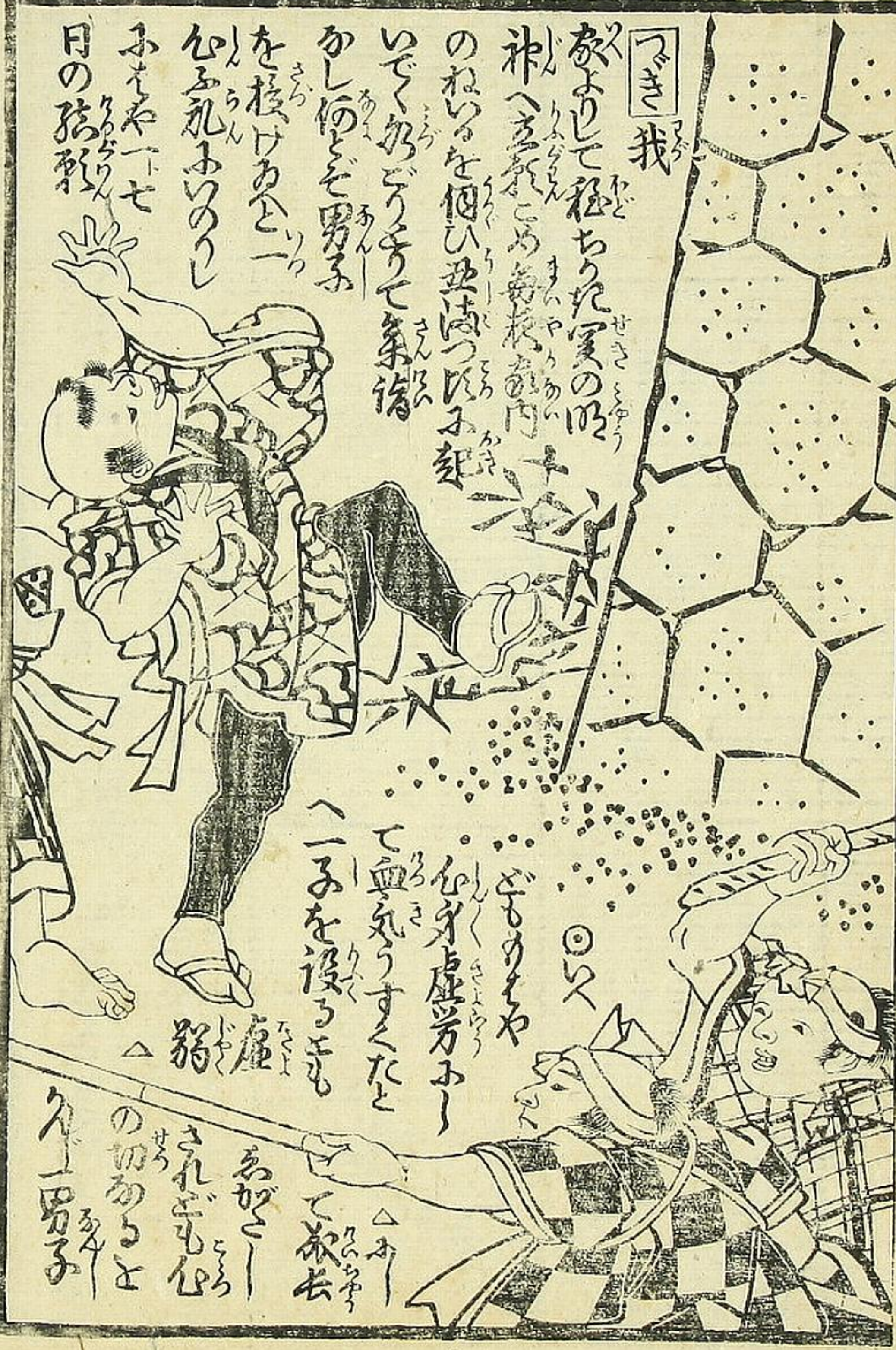
まご小
 秋さし
 次へ



大
 友に
 後近
 侍の
 だる

の
 地
 金
 小
 夜
 て

多
 女を
 何
 女を
 大
 を



つぎ我
 家よりして程ちりた家の
 神へまねこめ毎夜内
 のねいを個ひ其はつひ不
 いそぐらうりて糸借
 かし何とを男ふ
 を授けあとい
 心ふれあいのし
 ふとや一七
 日の結教

△お
 心身虚勞あり
 て血氣うすくなと
 一子を授るも
 △お
 て教長
 △お
 されども心
 の切あると
 久一男子



由家何のどくに神あ
 ひさまつぎう娘だ
 びおとてはるか
 りしがあまの心神
 つれあや職るも
 むくまらぬに
 忽ち一人りの
 神人
 ぬられ
 ちまはらり
 お宣ま
 く汝子あま
 正を懸る

左
 ままの
 △お
 て中
 ほやまらて信家お
 けは人の書
 をあさん
 まて特
 △お
 を授け免係
 一その子年十

つきを俵子神鹿の
 中人今あると云はまると
 ありしるる夢の身はみ
 涙のなききききききき
 後百多信心行々命じつ
 急ぎつらぬ入まらざる
 考へ金入たけらでその
 ま、おまそなる
 しが夢箱もか
 く懐格の
 月日とすき
 て寝くため
 ち、男ふ

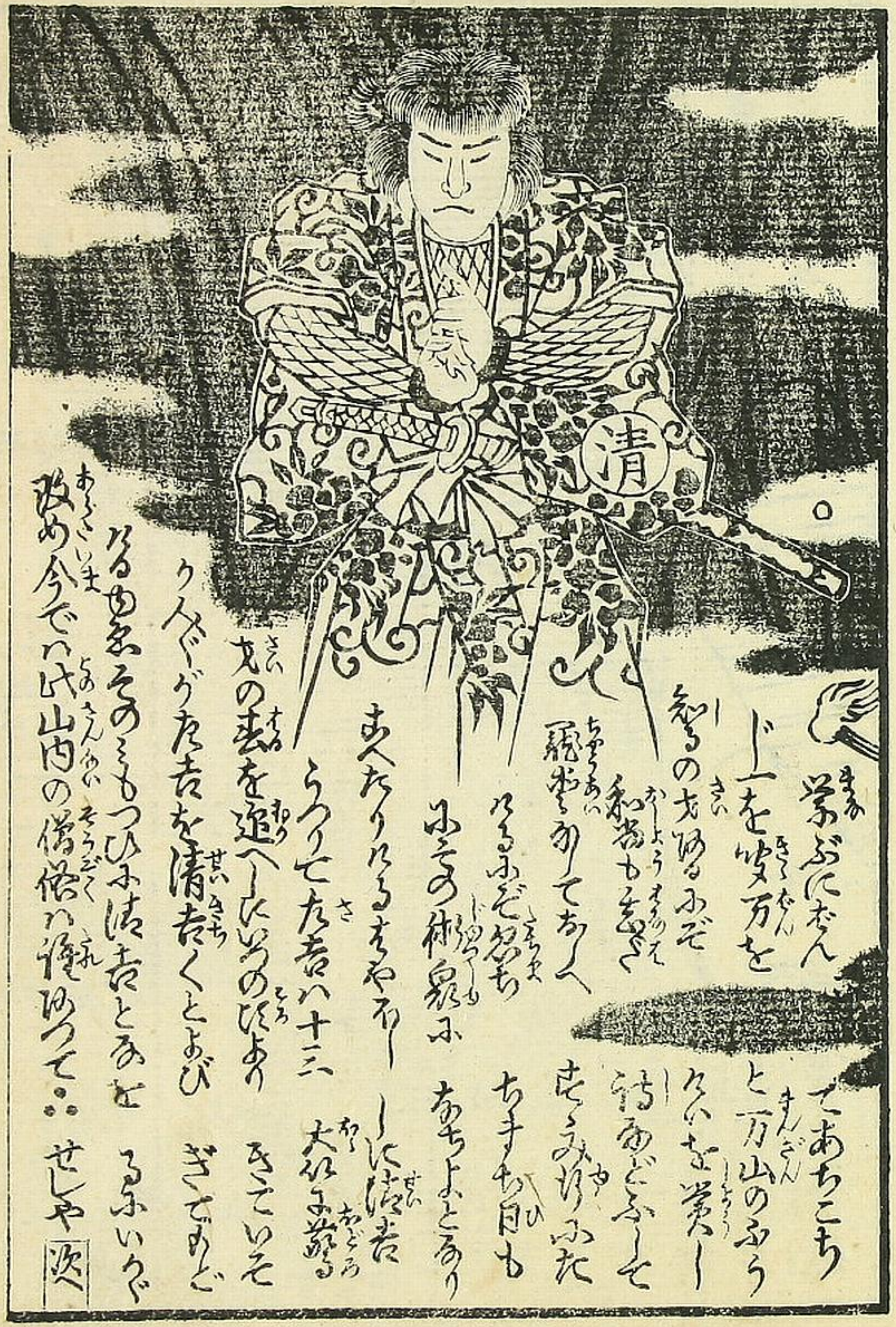


△種ありの出入
 止まらぬ中
 一ふを授けりふ
 いらんをま
 てるの
 利あ
 らん
 らん
 の
 長
 の
 後
 吳
 の
 愛
 あり
 らん
 か
 らん
 人
 女
 に
 お
 掛
 け
 は
 じ
 と
 終
 ぐ
 大
 ら
 ら
 ぶ

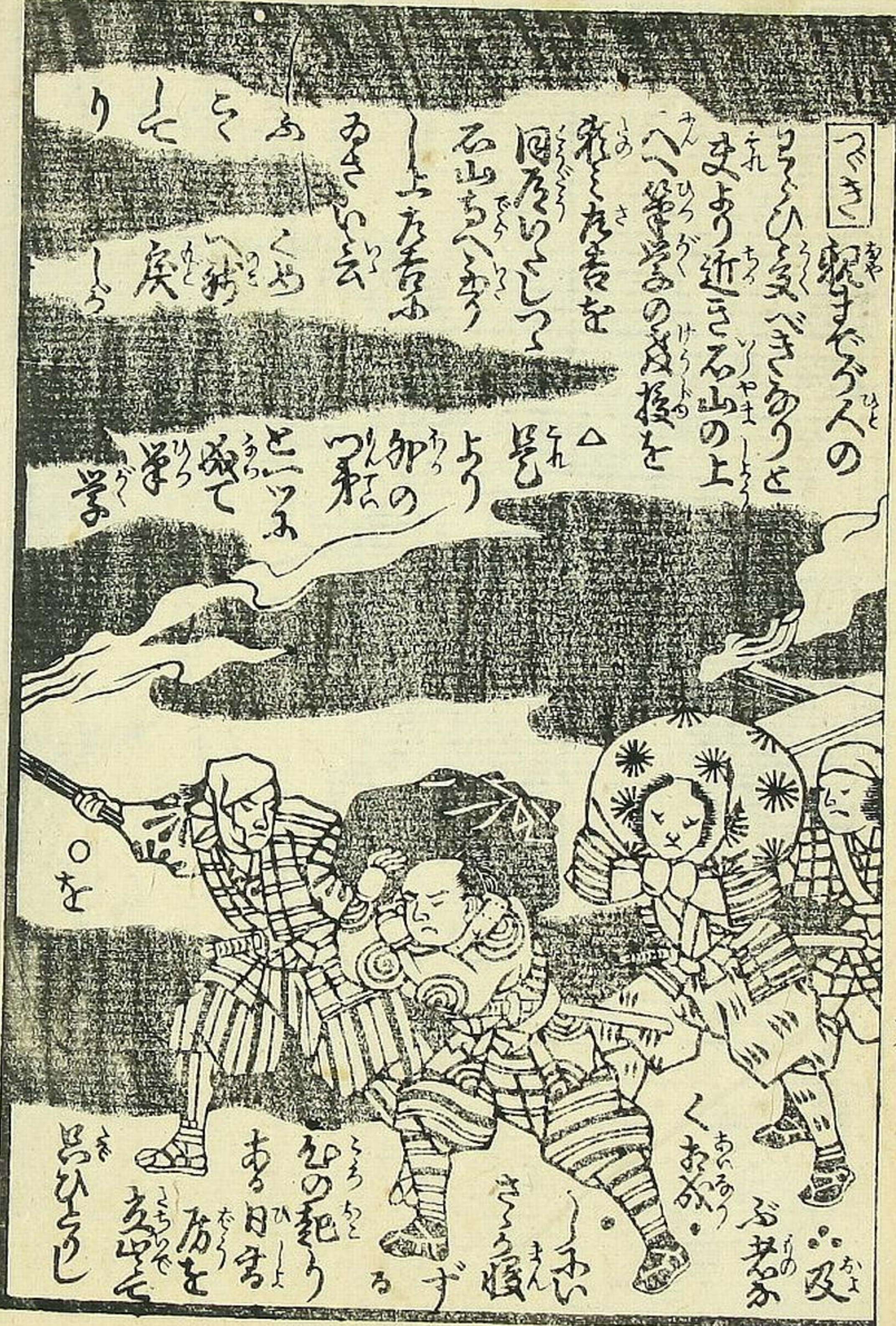
をらみ
 だああう後まきも
 二枚をばせしるる由
 竹濤の老見をさて
 世よりの
 船ふとの
 とあ見
 はんを
 りの山
 の人でも
 さを
 言れど



そとらら小児をい
 らんか
 らんか
 人女に
 お掛け
 はじと
 終ぐ大
 ららぶ



清
 今でいば山内の僧侶の権威つて... せしや次
 なる由もそのもつひは法衣とあるを... するふいぐ
 りんぐりた者を清者くとよひ... ぎてめい
 丸の表を連へしはらのひあり... きていそ
 夫たりなるをや... には法衣
 らうりてた者の十三... 大はま
 知の老母あそ... 侍あどふし
 一をば方... ちすも月も
 であちこち... と万山のふり
 久を... 侍あどふし
 侍あどふし... ちすも月も



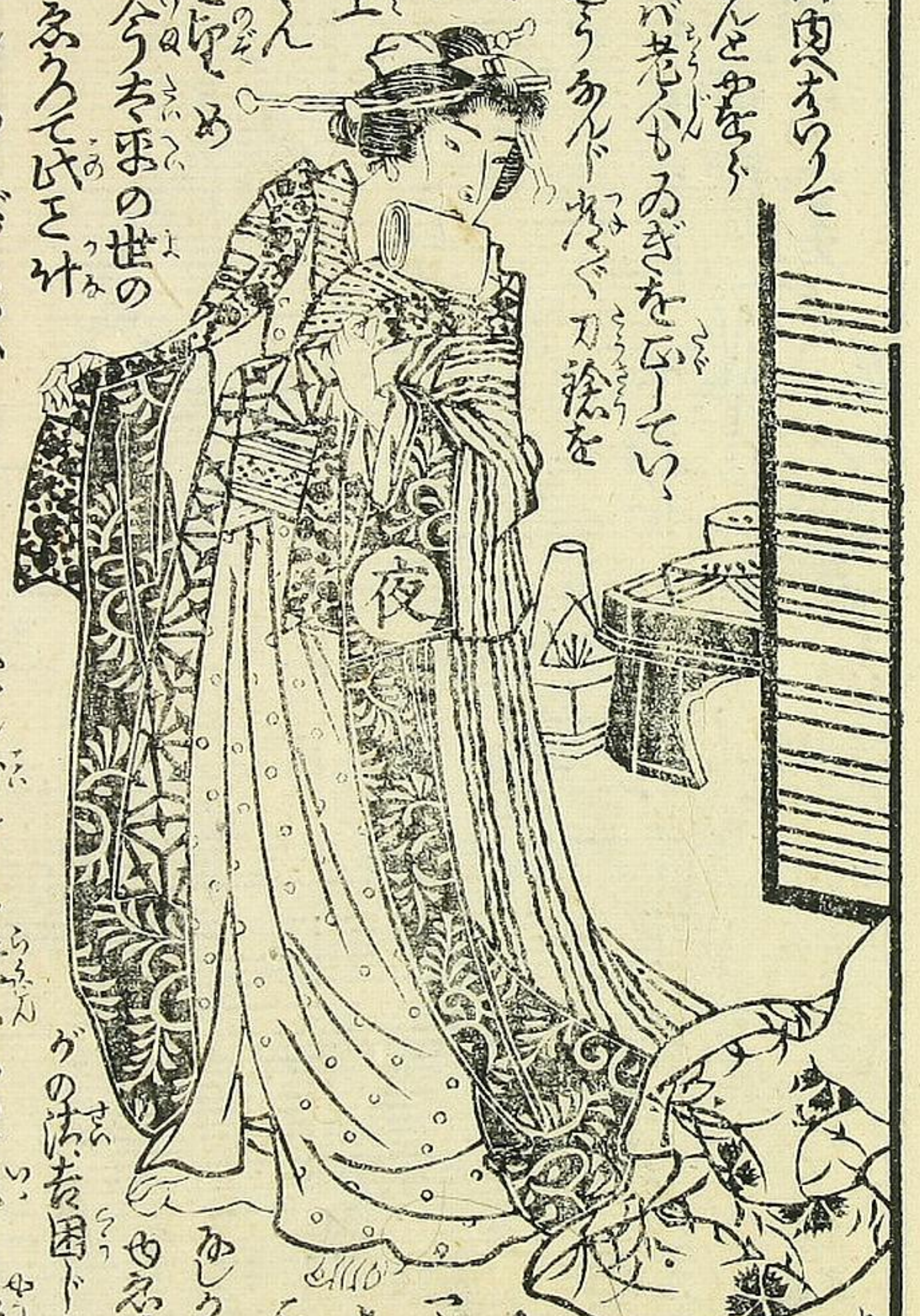
清者くとよひ... ぎてめい
 丸の表を連へしはらのひあり... きていそ
 夫たりなるをや... には法衣
 らうりてた者の十三... 大はま
 知の老母あそ... 侍あどふし
 一をば方... ちすも月も
 であちこち... と万山のふり
 久を... 侍あどふし
 侍あどふし... ちすも月も

つぎ 乃とまよ
 途 途 途
 上 上 上
 火 火 火
 小 小 小
 一 一 一
 有 有 有
 を を を
 老 老 老
 く 入 入
 法 法 法
 乃 乃 乃



清
 皆 皆 皆
 形 形 形
 を を を
 せ せ せ
 け け け
 ち ち ち
 龍 龍 龍

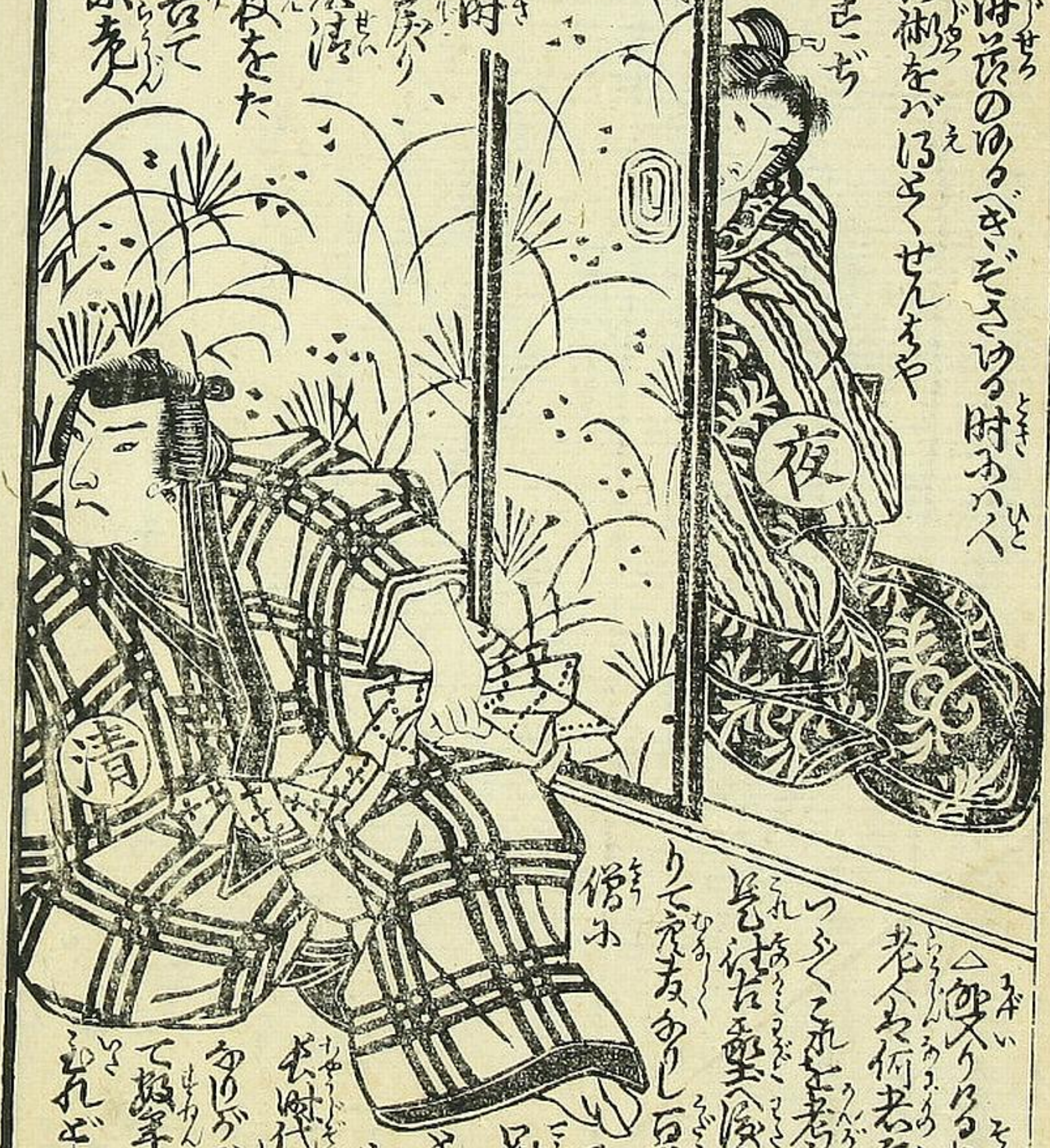
されば 由 由 由
 乃 乃 乃
 返 返 返
 乃 乃 乃
 の 上
 小 小 小
 王 王 王
 中 中 中
 止 止 止



の 法 法 法
 困 困 困
 一 一 一
 下 下 下
 も も も
 一 一 一
 も も も
 一 一 一
 も も も

つきはらう時辰のゆるぎとゆるの時あは
 お猪きれ一お徳をばはるせんや
 く後と一とせぢぢ
 の杖をバ△

△あへこ
 の杖にて旧
 物をふるるの時
 むちあふる入房り
 めとさなるおは
 者のいふ杖をた
 づきてぬを告て
 ぞまじにばふ老人

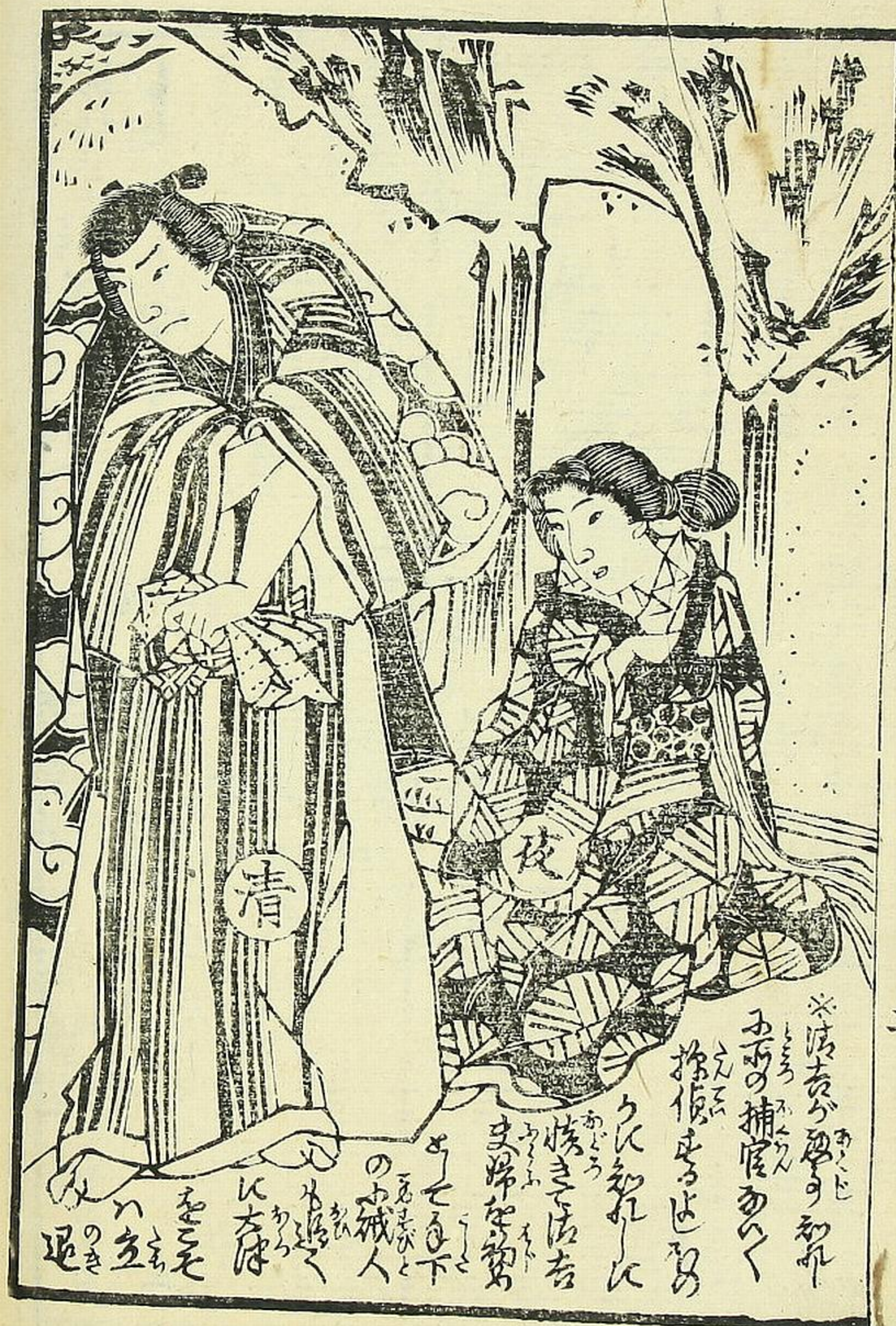
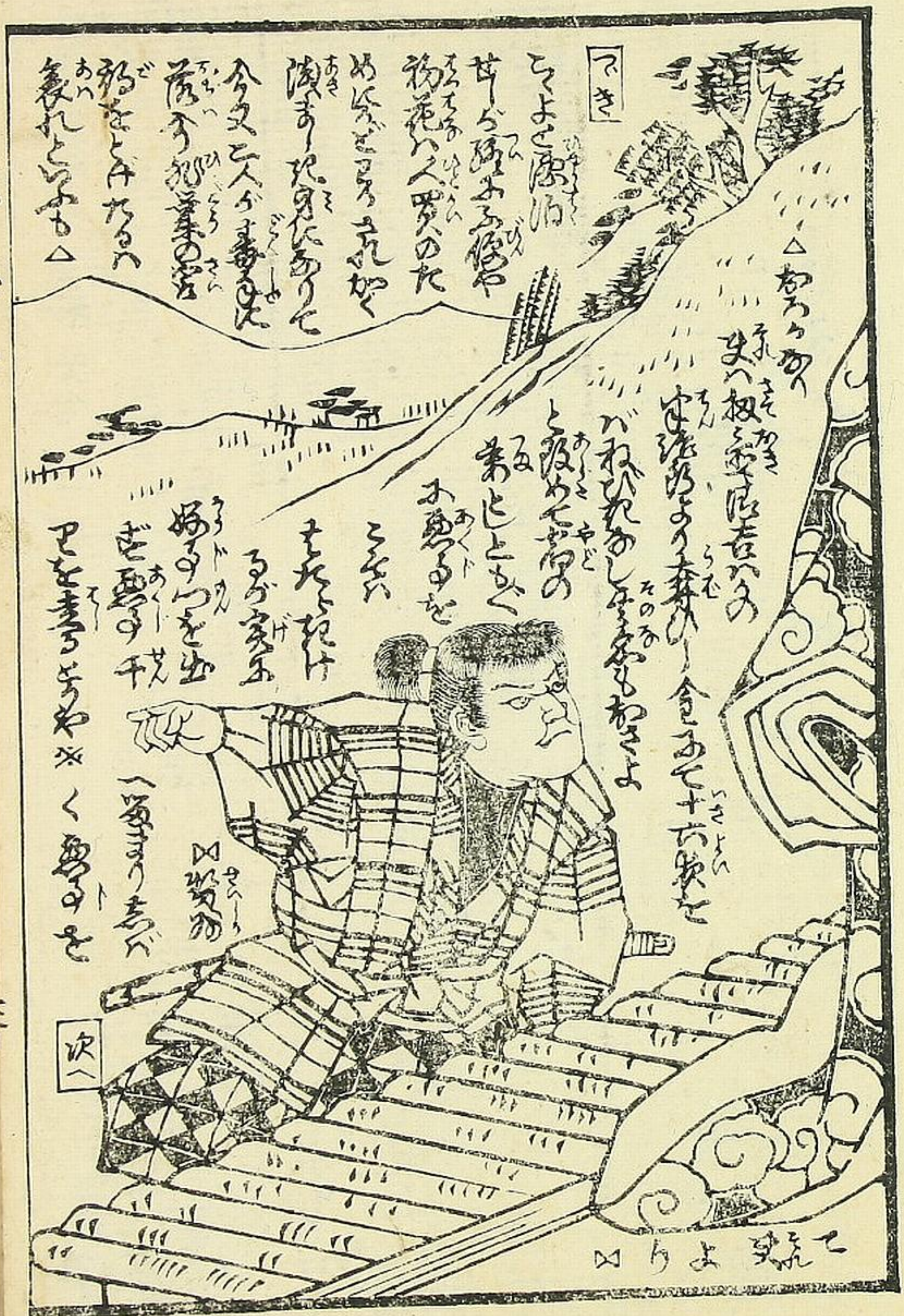


△雙りたる柳
 老人お何者ぞと
 つくこれと老あは
 是は若葉へ来
 りて度友ありし百傳の
 僧お
 建
 天
 ありが死
 て扱平よ
 るれども

の及のまへ、まらうの
 内ふちらお出れがら
 ぬれと雲来り杖を
 びるれはこれいとい大の杖
 抱るるまておまら
 き地上お投うて
 ばらち一條のまら
 も天よりあふと見
 へさ杖のまらまら
 けりの茶籠と化して
 合光をぬち琵琶湖の中
 へぞ飛入りるあを法者
 大の軒をぬちちの内へを△



程魂の持つて毎
 内へ入りて
 けはるる
 へを思
 色おもは
 言ハ被さ
 化れまら
 是は若葉の
 大いし懐
 去状をり
 云母りれ
 任せつは
 中
 方丈
 中
 込
 隠



二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

下

傷らまじふ天 八餅の船の風
 見れば雲がふとた
 ける花見のよしてあ
 けつき 雲は
 月の照るま
 とはさるま
 けりて
 雲を
 大いなる
 大いなる

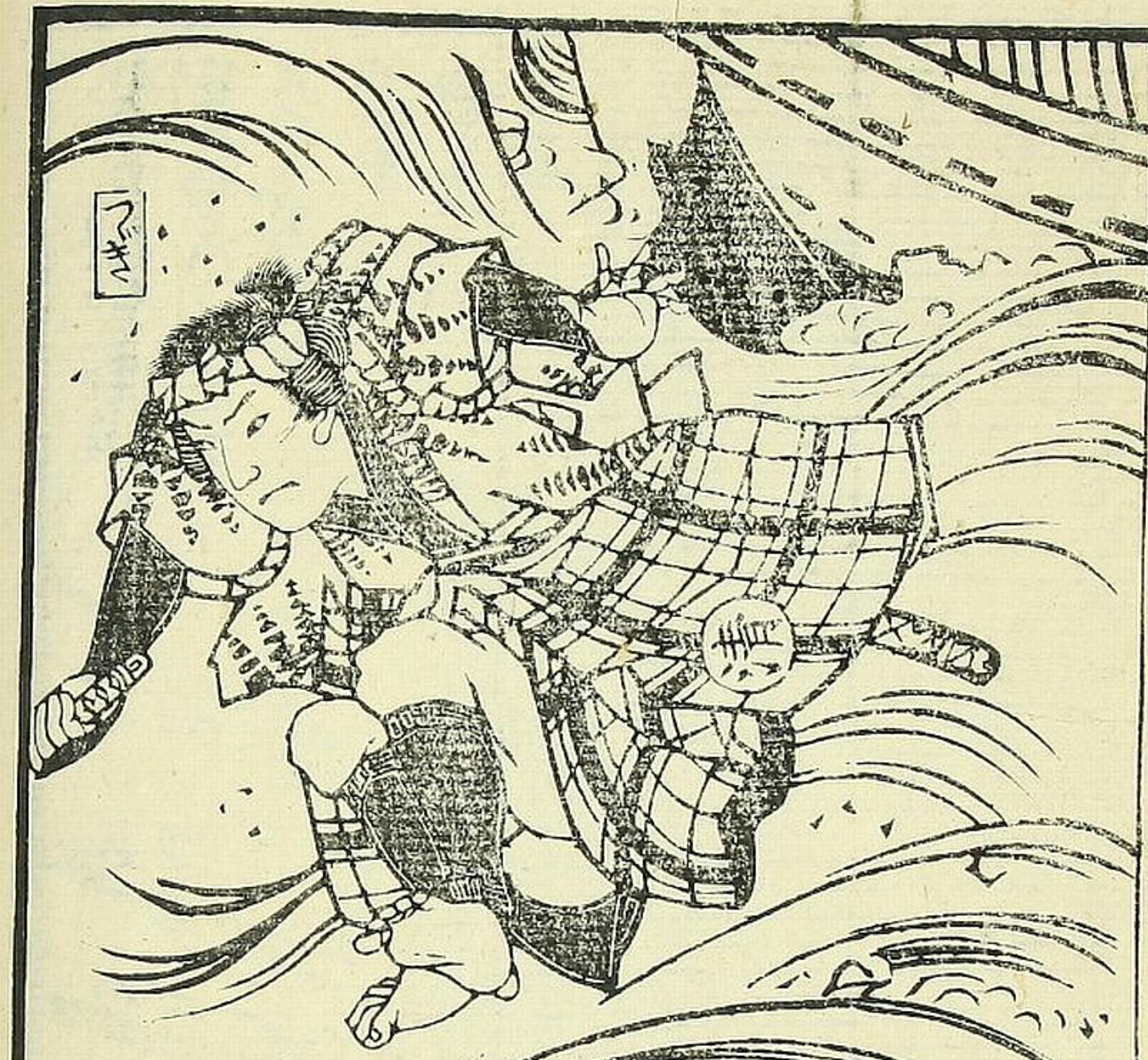
白浪
 天をひ
 一七九
 だんげど
 もすゆ
 けりて
 けりて
 けりて

かなよの海を連つんと
 雲を
 雲を
 雲を
 雲を

梅取の
 梅を
 梅を

白浪
 天をひ
 一七九
 だんげど
 もすゆ
 けりて
 けりて
 けりて

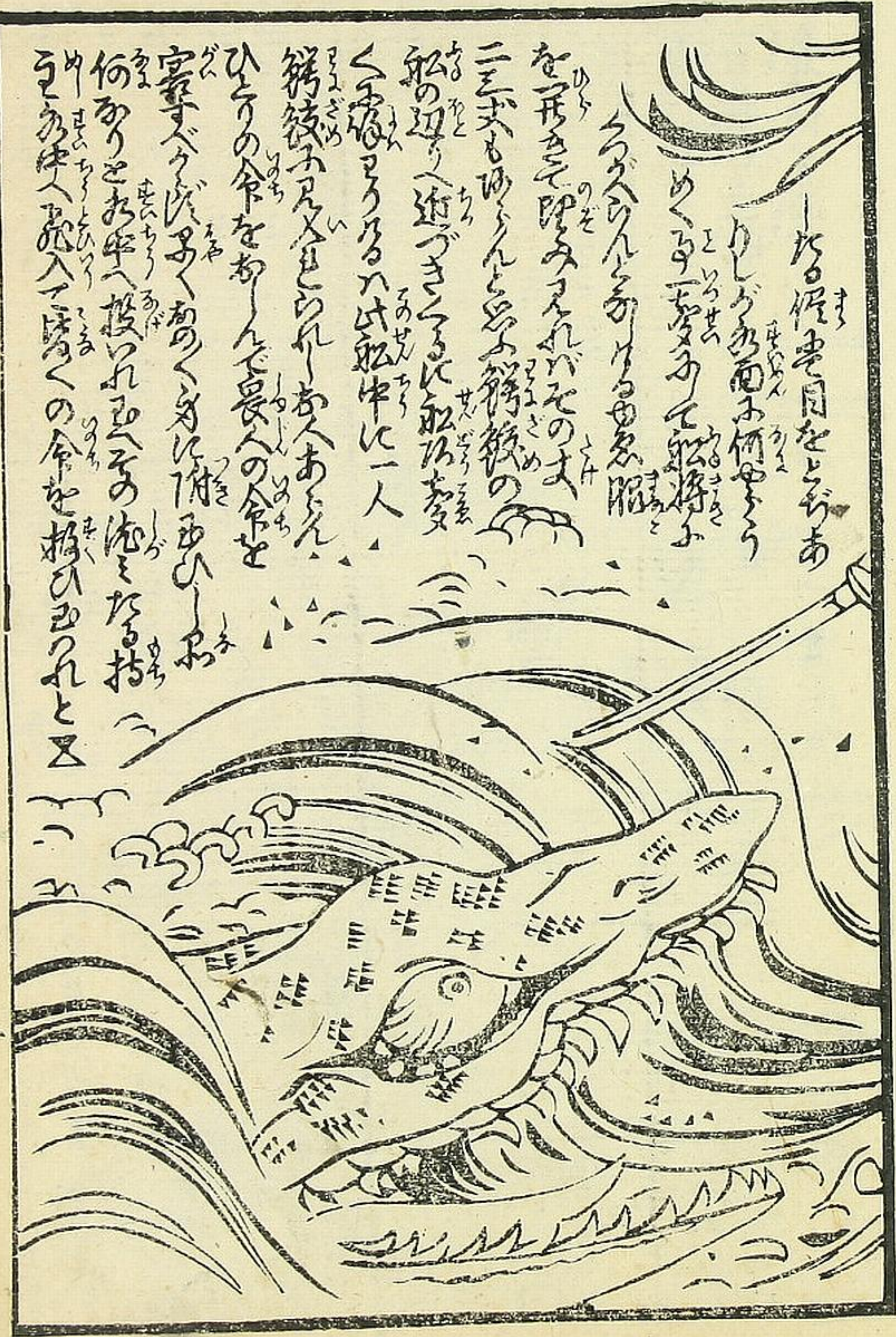
舟の思



つぎ

五子日... 舟の思... 舟の思... 舟の思...

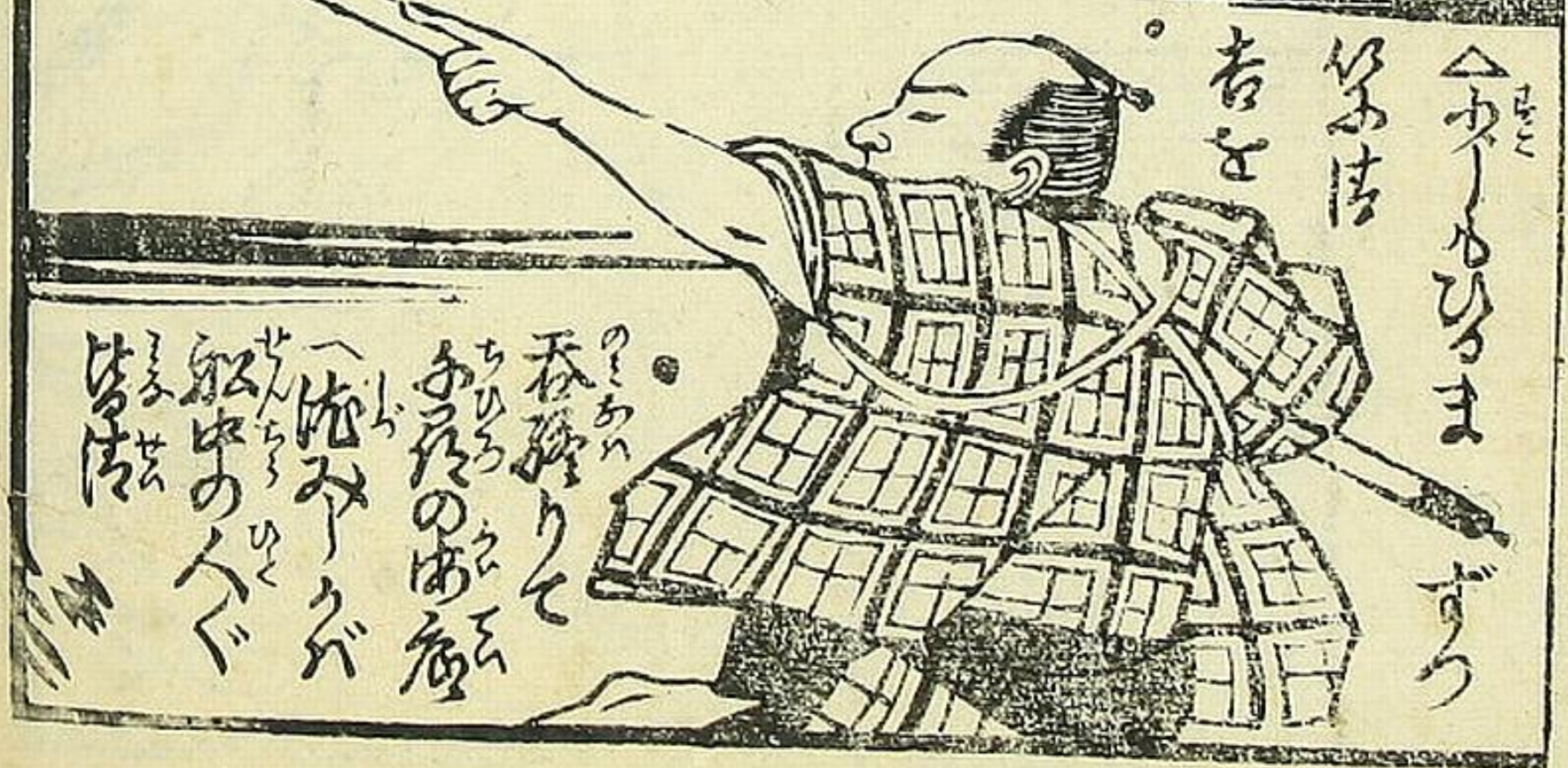
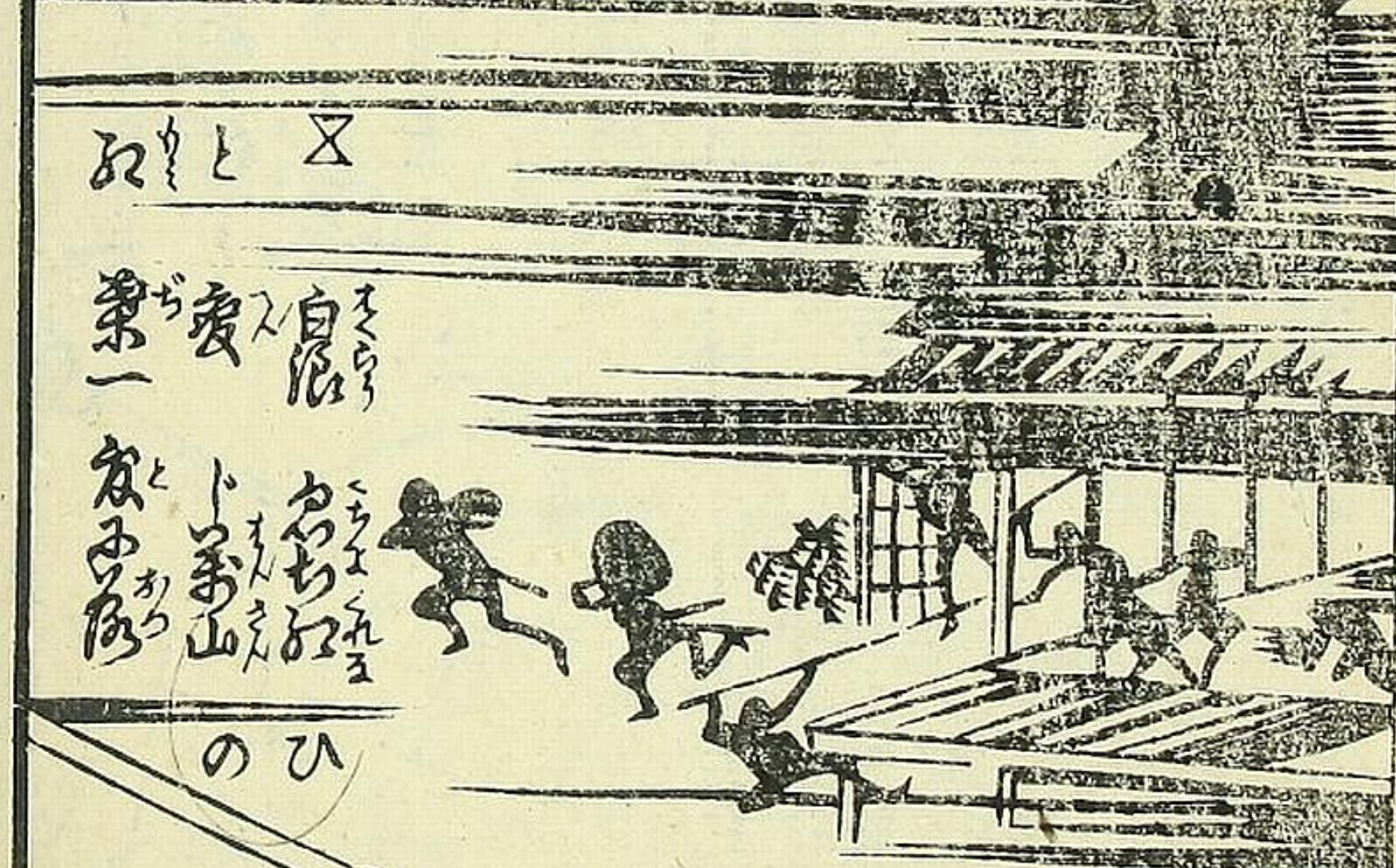
つぎ



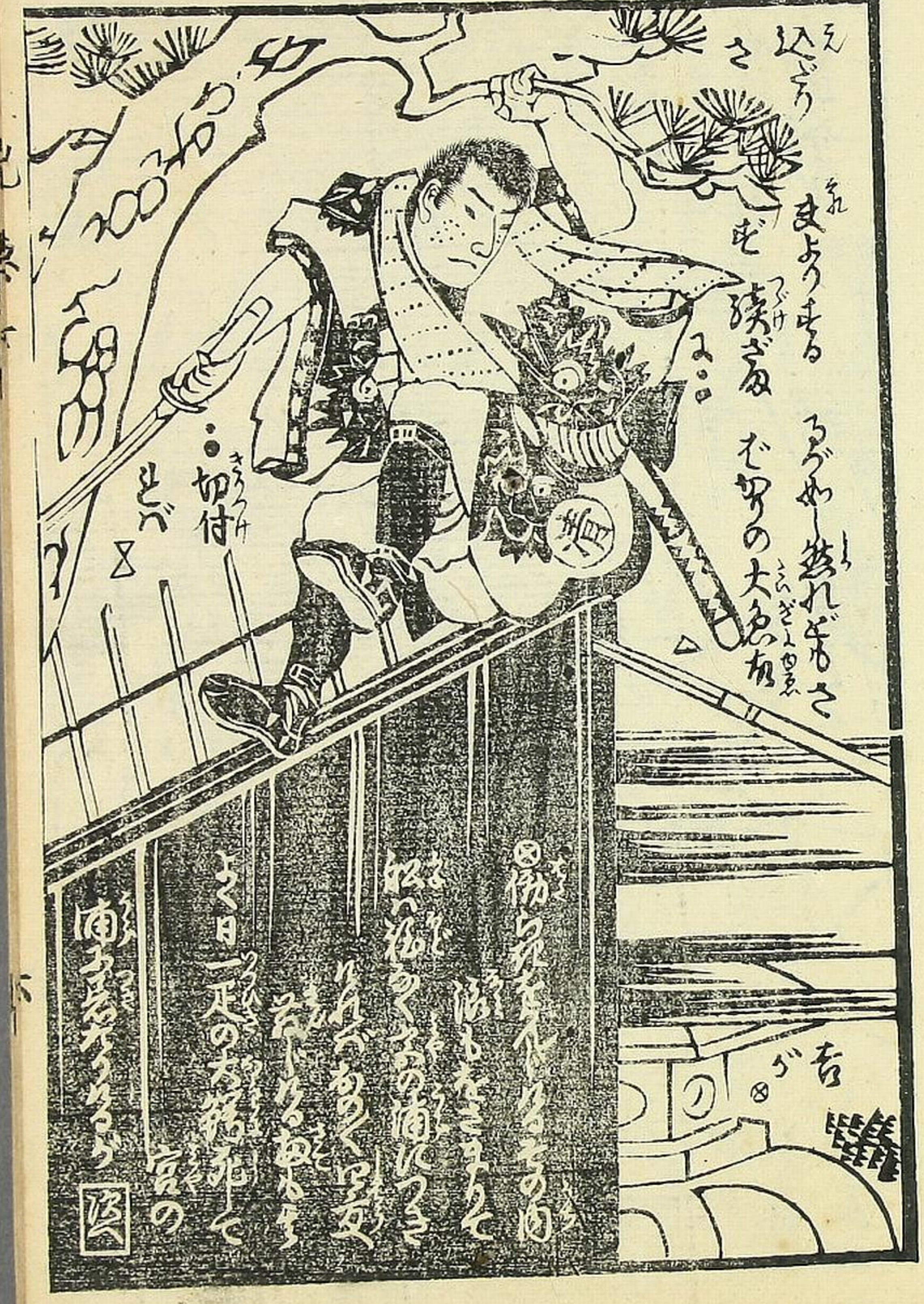
一はる... 舟の思... 舟の思... 舟の思...

つぎ

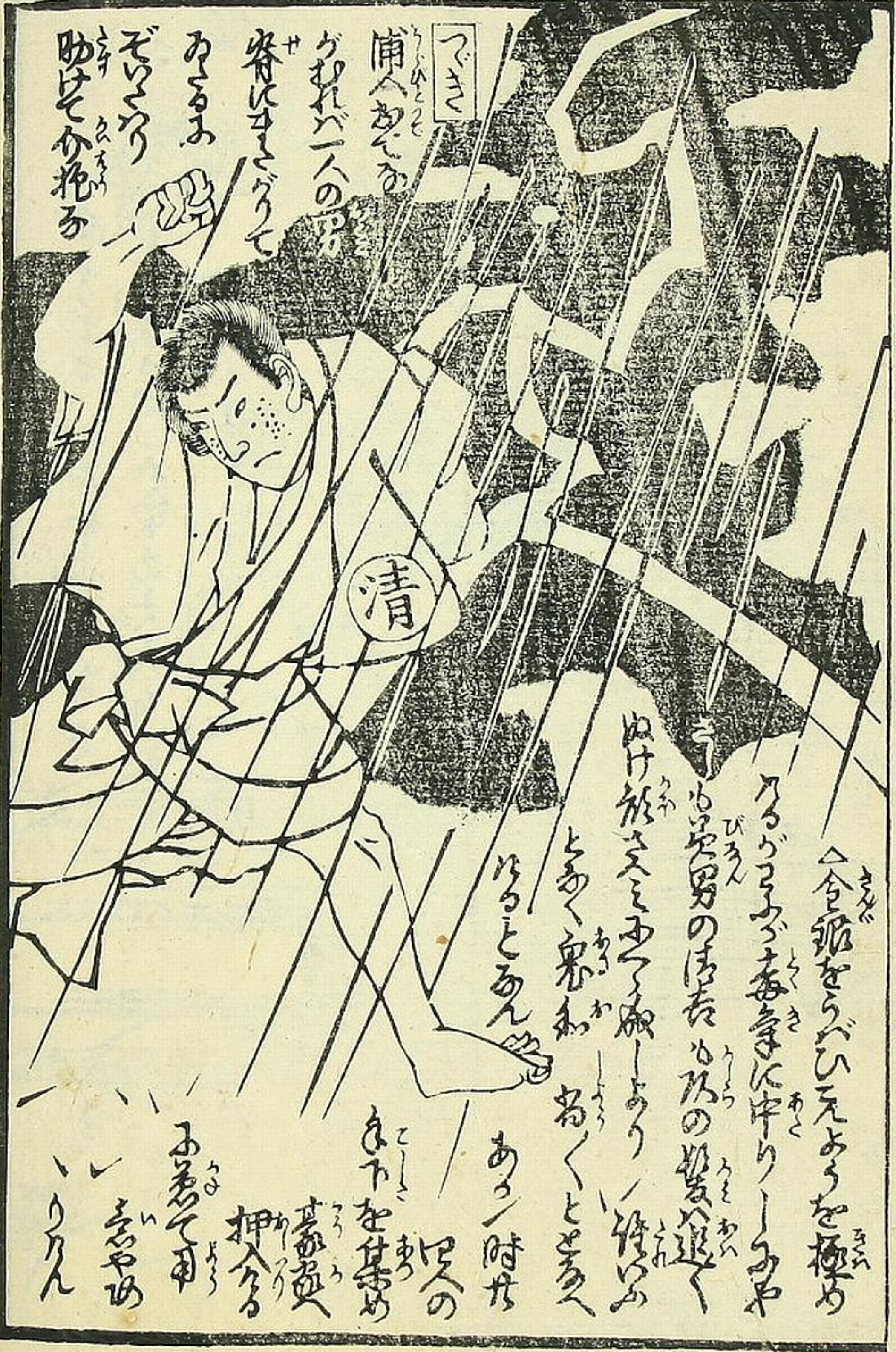
べき 象人の命を
 つたふまや青い髪を
 髪を髪を髪を髪を
 あははあを髪を髪を
 たびに命を合おせん
 とおや終りて運もはあ
 おんんんんんんんん
 けいの音をとききは
 者を香んとす法者
 えんりあしのめをほ
 たれは身をひかりて
 一刀切つ月に照らす
 鼻のゆへいほくまう



△ありひつまま
 係法
 者さ
 春あかりて
 ちのちのあそび
 おのののあそび
 一ゆみりて
 船中のひと
 係法



込り
 さ
 まよりまの
 るがや然れどもさ
 ま
 ま
 け
 まの
 大
 色
 あり
 加付
 切
 日一正の大橋死して
 官の
 浦子若らるるが
 係法



つぎ
捕へおこる
うむれ二人の
脊にさしうて
あゝあ
ぞいり
助けをたれ

△金銀をうばいえようを極め
るがさうさ毒草に中りしあや
うも男のはたかひの髪を退く
ぬけぬえとあつぬきより、竹の
とく鬼おおくときさ
らるとあん

あつぬきの
ま下を甘め
毒草
押入る
あつぬき
さああ
りらん



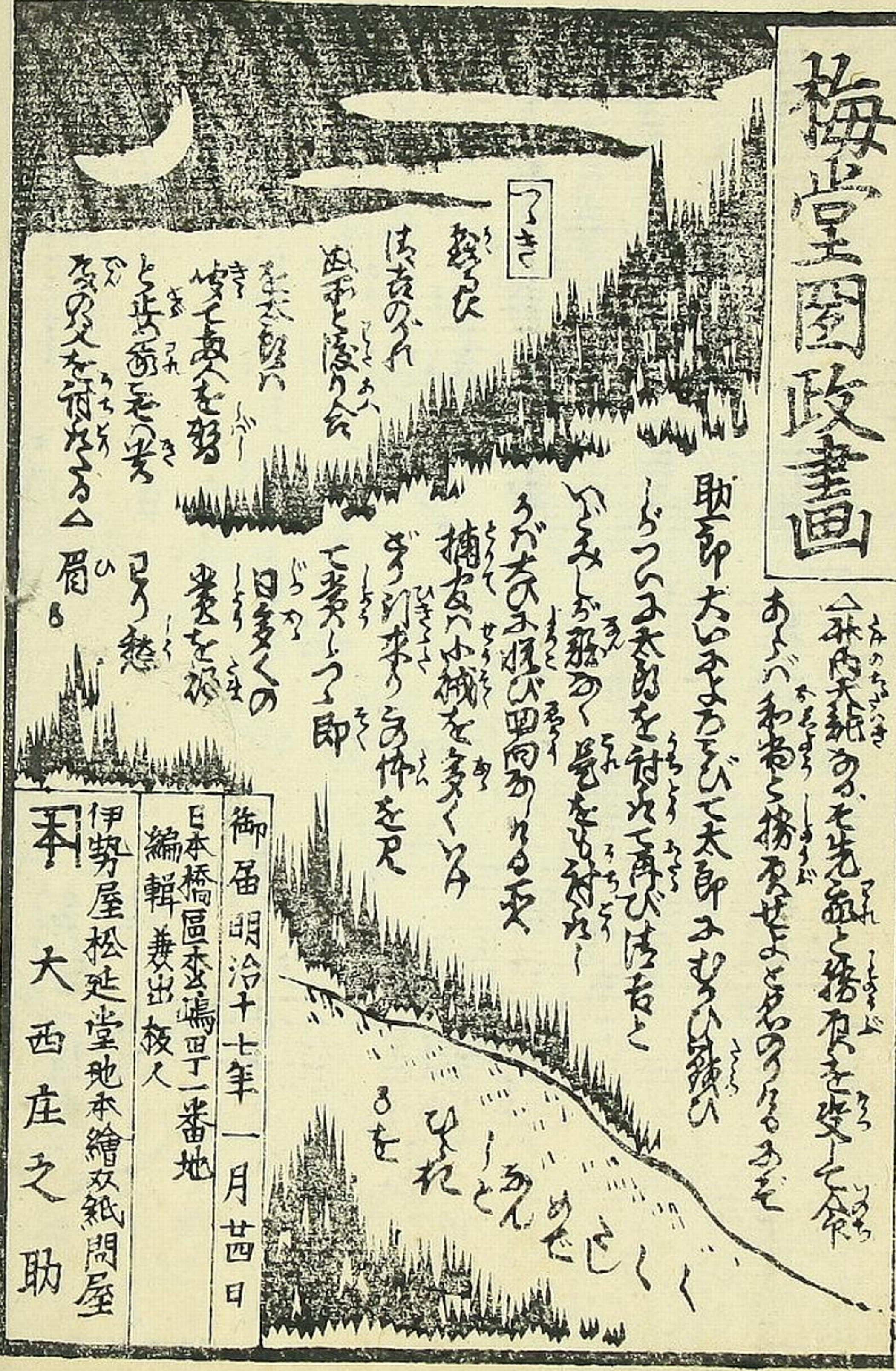
その暇りある
ぐま汁は解
を退治せし
あゝあ
は者あり一旦
に春れを後をきり
破りて退治せし
と面めんおこる
痛りなる板文
あつぬきの
又く屋あお
を止む強
をたれさう△

△金銀をうばいえようを極め
るがさうさ毒草に中りしあや
うも男のはたかひの髪を退く
ぬけぬえとあつぬきより、竹の
とく鬼おおくときさ
らるとあん

010190515651

京	中	二	〇	傳	全三冊	國	定	忠	治	實	傳	全六冊
大	天	一	坊	物	語	日	敵	討	伊	賀	之	水
大	越	後	傳	吉	譚	日	梅	加	賀	金	沢	文
明	越	後	傳	吉	譚	日	梅	加	賀	金	沢	文
天	海	水	野	傳	日	由	井	正	雪	一	代	記
新	討	島	山	實	記	日	岩	見	重	大	郎	一
延	命	院	實	錄	日	白	井	權	八	一	代	話
泉	幸	藏	身	傳	日	不	破	名	古	屋	賴	當
村	井	長	春	定	遠	傳	日	大	國	記	十	州
												切

梅堂園政畫



△林内天統ありそ先皇と務有き交々今
あふのわがと務有きよとあつるもそ

助即大いそちて大即みむひ後ひ

らつひ大即を付て再び法者と

いふしか那やそを付た

うかたみほひ四向かたる

捕友の小械を多く

ぞり来りて作を見

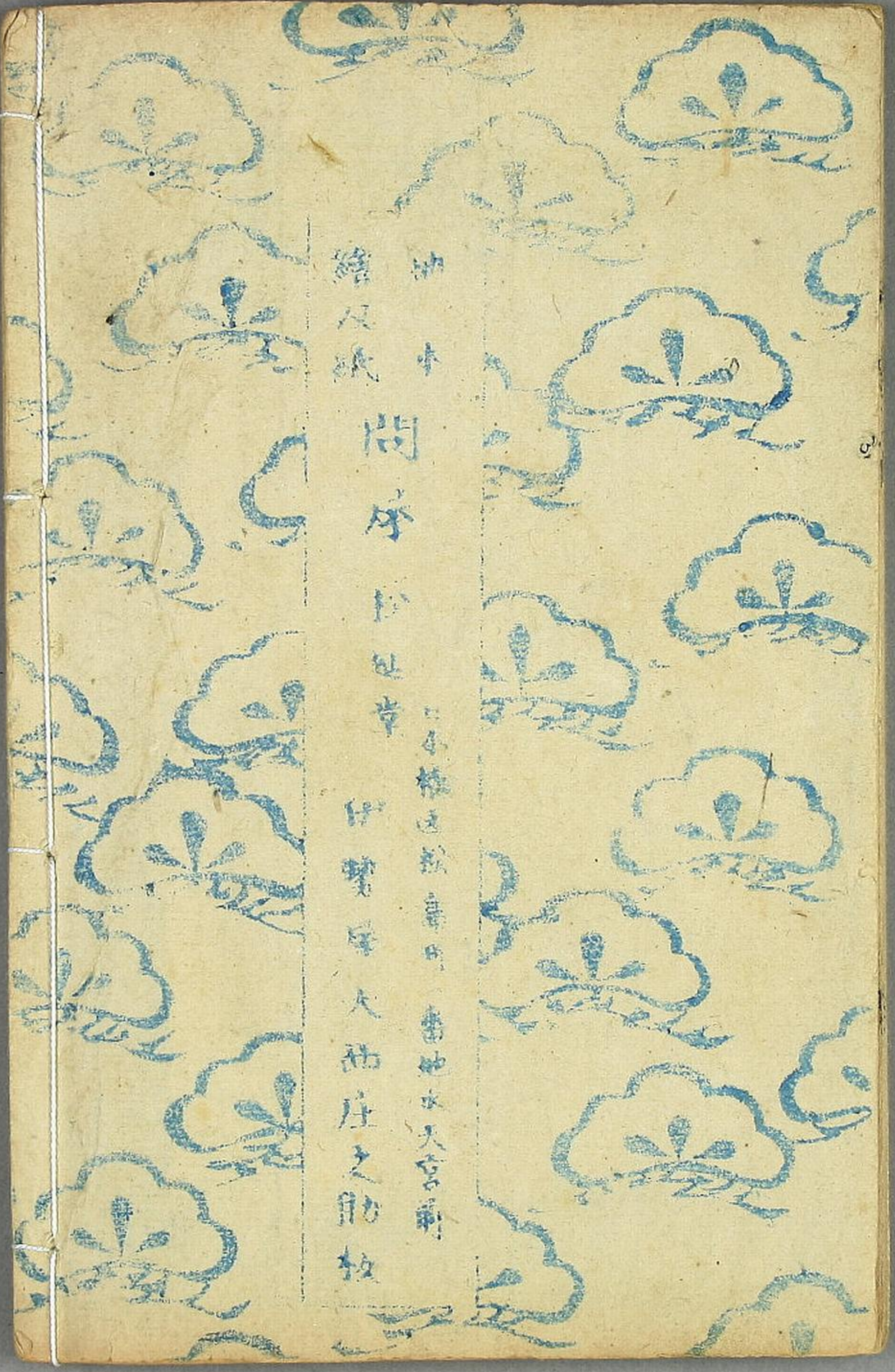
こそしつ即

日多くの

衆を

眉

御届明治十七年一月廿日
日本橋區本町馬場丁一番地
編輯 兼出板人
伊勢屋松延堂地本繪及紙問屋
利 大西庄之助



繪
 問
 序
 抄
 世
 章
 伊
 贊
 序
 大
 而
 庄
 之
 助
 故

二
 本
 樓
 送
 松
 壽
 所
 番
 地
 水
 大
 宮
 前